第十六編 名所舊蹟

大正天皇御野立所 …… 123
大信寺 …… 123
顯証寺 …… 123
お遠夜市 …… 123
大聖将軍寺 …… 124
日羅寺 …… 124
龍華寺大門跡 …… 125
常光寺 …… 125
木村長門守の墓 …… 126
野史の飯田忠彦 …… 126
切支丹墓碑 …… 127
伴林光平顯彰碑 …… 127
環山桜 …… 128
樟本神社 …… 129
渋川神社 …… 129
矢作神社 …… 129
許麻神社 …… 130
八尾天神社 …… 131
年中行事 …… 131

大正天皇御野立所　(佐　堂)

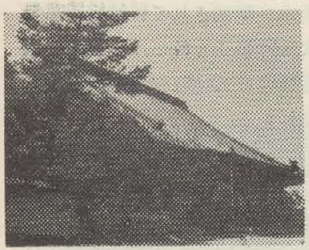
近鉄久宝寺駅北西方約1町余布施市金岡に接する所方約10間周囲に植樹があつて中に丈余の記念碑があり、大正3年11月17日陸軍特別大演習の際大正天皇が行幸あらせら約1時間に亘つて親しく御統監遊ばされた所である。

御野立所跡の碑

願　証　寺　(久宝寺)

当寺は真宗本派の別院別格で一般に久宝寺御坊と呼ばれ、河州11郡の各末寺を統轄していた巨刹である。その前身は西証寺と称し、蓮如第1男実順が住んでいた。処が実順若くして遷化し後嗣がなかつたので、享禄2年10月近江国大津三井寺の南別所近松の近松山願証寺に在住していた蓮如第6男の蓮淳を寺号もろとも当地へ移り住せしめた。当時は大阪石山本願寺の華かなりし時代で、当寺は石山の防禦に必要欠くべからざる地点で、古くから重要視された寺である。

当寺も亦甚だ宏荘でその建坪総計965坪に及び後庭には有名な含月軒という茶室もあつが荒廃大破してしまつた。現在の堂宇は宝永7年4月に再建されたものである。



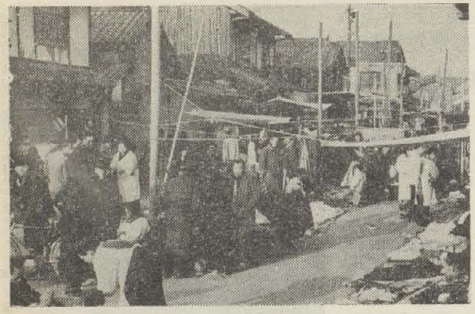
八　尾　御　坊

大　信　寺　(八　尾)

八尾別院又は八尾御坊と呼ばれた真宗大谷派の別院である。開基は本願寺第12世教如で徳川家康の護持によつて慶長12年3月に建立された、本堂は棟行17間梁行15間という巨大さで、その廣間書院庫裡太鼓楼等の大建物が聳え立つている。書院の襖24枚は円山應挙の筆と傳えられている。なお天明8年正月本山本堂炎上の際は当寺の本堂を解体京都に引移し本山仮本堂となつたことがある。その後寛政11年12月還付せられ再び当地に聳え立つた。ところが昭和28年3月3日突如本堂大屋根が落ち目下原因調査中であり近く復旧する予定である。

お　逮　夜　市

毎月11日と27日盛大な露天市が今なお行われている。この露天市の行われる場所が久宝寺御坊と八尾御坊との間数町に亘つているこ



お 逮 夜 市

と、その名称がお逮夜市と言われているところから察するとこの両寺院に関係の深いものであることは否めない。お逮夜は忌日又は命日の前日である。

例月27日は親鸞上人のお逮夜に相当し、両寺院は宗祖の法要を盛大に厳修する。近郷の善男善女が踵を接して参詣し法話を聽聞する人が群集する処商人又集り沿道に店を張りかくてこの市は形成されたのであろう。この市の起源たるや遠く織豊の時代であろうか。

大 聖 將 軍 寺 （太子堂）

草創は聖德太子と傳えられ世俗に下の太子と呼んでいる。

聖德太子が物部大連守屋を御討伐の時この地で両軍が大激戦を演じた守屋の軍勢は強盛であつたので、太子の軍は非常に苦戦に陥り危難は太子の御身に迫つた。丁度その時路傍に大きな椋の木があつたので、太子はこれに身を避けられ無事に難を免れられた。太子はこれを大変歡喜されて**神妙椋樹悲母木我身出生廣大思紹隆佛法今成就日々影向不退轉**と唱えられ、やがてこの地に伽藍を建立、神妙椋樹山大聖將軍寺と名づけられたと云う。中世以後数度の兵亂に伽藍は荒廃し又明治21年の暴風に本堂は倒壞し全く旧観を失つた。本尊は如意輪観音で室町初期の作と思われる。又太子16才の聖容とも奉安している当寺の境内には老椋樹があり附近には守屋の首洗池、守屋の墳がある。

日 羅 寺 （木ノ本）

樟本神社の境内に荒れ果てた一小堂宇がある。これが日羅寺で往年の名殘を辛くもとどめている。日羅は火の葦北の国造阿利斯登と云う人の子で宣化天皇の御代にこの人親子が外交使節として百濟に遣わされた。日羅は賢明であつたので百濟王はこれを愛し官につけた。たまたま日本では任那政府の再建が目論まれ、半島事情に明るい日羅を召還すべしとの議が起り、敏達天皇12年に紀国造押勝、吉備海部直羽島の二人を使節として日羅の召還を申入れた。百濟王は日羅を惜んで申入れに應じないので重ねて羽島を遣わし今度は強硬に談判、百濟王はついに恩率、德爾を日羅に隨伴させて帰国を許した。

朝廷は阿斗桑市に館を造つて日羅をおき優遇された。この阿斗桑市は木ノ本の古名だと傳えられここに一宇を建立して薬師佛を安置したのがこの日羅寺だと云う。その後朝廷では、しばしば使を馳せて日羅に策を問われ彼は又悉さにその策を具申した。百濟より目付役として隨伴した恩率、德爻等は災の祖国に及ぶを恐れて帰途ひそかに謀つて日羅を暗殺したという。

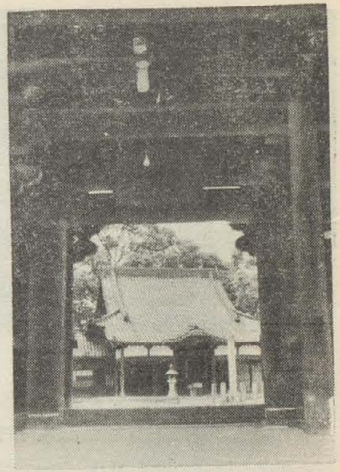
常　光　寺　(西　郷)

当寺は臨済宗南禪寺派に属する禪刹で、本尊が地薬菩薩である所から、八尾地藏と云う方が広く知れ亘つている。日本三地藏の一に数えられ、古狂言にも八尾地藏の一作があり、古くから普く知られた名刹である。

聖武天皇の依願により行基が建立し新堂寺と称した。弘仁年間に小野篁が、地藏の尊容を彫刻し安置した。現在の本尊は即ちこれである。寛治2年に白河法皇本尊の霊験を聞し召し、御参詣あつて人面舍利を奉納あらせられた。その後戰火のために堂塔は大破荒廢に帰した。至德2年7月、又五郎大夫兼原盛継と云う人大いに中興し輪奐は旧に復した。明德2年足利將軍義滿は当寺の住持通玄東堂に帰依し荊田、焚鐘初日山及び常光寺の扁額を寄進した。これより旧号を改めて常光寺と称することになつたと云う。

天正17年には豊臣秀吉が病氣平癒祈願のため米五石を寄進しているのも寺宝の寄進状によつて知られる。

慶安元年8月德川將軍家光、この古刹維持の資として寺領17石2斗余を寄進し、引続き歴代將軍より御朱印を賜つて明治に及んだ。



常　光　寺

河内名物地藏踊り

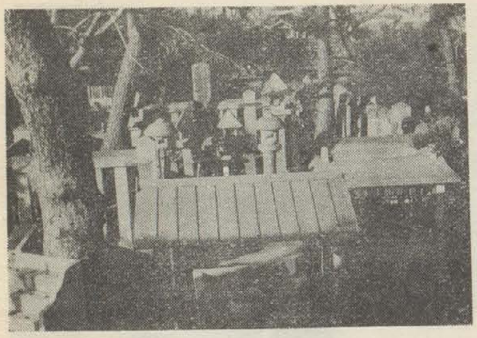
当時の境内には八尾別当顯幸の墓、藤堂家臣七十一士の墓、八尾寺内村開発者森本行誓居士の供養塔がある。寺宝としては前記の佛舍利、義滿の扁額畠山三河氏一族の寄進状制札、應永6年の常光寺縁起、永正6年の勧進帳、嘉慶2年在銘の鰐口等がある。例年4月24日に大施餓鬼会を嚴修し境内では地藏踊と称する大盆踊が行われ、河内の一名物となつている。

龍華寺大門跡　(植　松)

龍華寺は称德天皇が神護日京雲3年多10朔日に由義宮へ行幸せられ折肆塵を避てられて遊覧せられ、当寺へ塩30石施入せられし事が続記に見えている。これより察すると草創は奈良前記と思われるが明らかでない。

其の後桓武天皇延暦19年に燈明料として若江郡の田1町5反を賜施せられてい

る。以後杳として龍華寺は史書から消え去つたが現安中小学校の辺大門と称する地に大礎石が二基田の中に千古の名残を留めている。



木村重成墓

木村長門守重成之墓　（西　郡）

墓は西郡北の辻北端若江村の東南と境を接する位置にある。碑石高さ3尺，台石高さ約2尺，周囲1丈2尺で南面し、碑石は角であるが、殆んど円味を帯びている。

この碑石は彦根藩士安藤長三郎次輝と云う人が、重成百五十忌辰に菩提のため建てたもので、この長三郎次輝の先祖安藤長三郎重勝こそは、重成の首級を挙げた人である。

慶長20年5月6日西軍　將木村重成は若江に陣を布き、東街道を南進する東軍の側面攻撃に出た。東軍は直ちに藤堂、井伊の両隊を西進させ西郡若江に激戦は展開した重成は最初藤堂隊を撃破し相当の損害を與えたが、つづいて井伊隊の攻撃をうけ終日轉戦の疲労と衆寡敵せず、遂に重成は庵原助右衛門朝昌の槍にかかりて落馬、安藤長三郎重勝すばやくその首をあげた。家康がこの首を実驗した時いともゆかしい伽羅の匂がしたので重成の用意周到を歎賞したのは名高い話である。大正8年大阪府がこの戰場に標石を建て「此の附近重成奮戦之地」と題した。

野史著者飯田忠彦先生旧棲の地（八尾慈南町）

八尾沢の川通りと慈南町と交叉する東南角聞成坊と云う寺がある。これより東方にかけて一帯が、飯田忠彦の旧邸の跡である。

飯田忠彦は野史291巻諸系譜80巻その他多数の著書を殘した国史の研究家であつて、晩年は史料蒐集のため諸国を遊歴したが、その青壯の時代はここの二階に引籠つて刻苦精励読書に倦まなかつた。当時の彼を評して二階の先生と渾名したそうで、忠彦は周防の德山で里見新十郎の二男として産れ、幼にして明敏恰利13・4才ですでに継史に通じ、又武技をも兼備えていた。

文政元年偶々河内に遊学した、当時八尾の大庄屋で学問を好んだ飯田忠右衛門は彼の人爲を悦び迎えて嗣となす。

その後安政6年江戸に赴き、天保6年華頂宮の指南役となり、ついで有栖川宮に奉仕、天保10年中宮寺宮の内客となり、去つて又有栖川宮の侍臣となり京都に住した。たまたま万延元年櫻田門事件が勃発して、交友の関係から彼もその嫌疑をうけ、伏見奉行所に拘置され、殘酷な幕吏の取調べに憤慨し劇毒、時に万延元年5月27日年63才であつた。

切支丹墓碑　（西　郷）

八尾市西郷共同墓地の石碑の間に一見、舟底型ともいうべき一碑がある。この碑は高さ2尺、幅1尺4寸8分、厚さ約7寸、表は平面で大体円味を帯びその先端がやや尖つている。その上部に大きな十字架、その下に横書でＩＨＳ、またＭＡＮＴＯとあり、右側に天正10年壬午、左に5月25日と紅字で刻んである。天正10年といえば我国キリシタンの最盛期である。切支丹墓碑は他所にも相当発見されたが、大体は板碑型立石か蒲鉾型置石で年代的に見ても元和、慶長期のものが多い。然るに本碑は前記の通り舟底型であり時代も一層古いので、学界ではこれを珍重し、重要美術品として指定した。

若江城主三好義継の重臣に池田丹後守という人があつた。織田信長が天正元年11月に、若江城を陥れた後は信長の至となり、若江、八尾両城の守護の任にあつた。この人は永禄6年洗礼を受けてドン・シメオンと名のつた程の篤信者であつた。彼の家臣も亦大多数、彼に倣つて信者になつたと見え当時八尾にはすでに大多数の信者がおり、名ばかりの教会堂とはいえ一堂を設けて盛に集会していた事が明らかである。然らばその教会堂は何処にあつたか、八尾では小字名ではないが、古くからバテレン屋敷と称する約二百坪位の地域がある。場所は八尾市大字西郷の谷小路と云う通の真中程を一寸西へ入つた辺である。明治初年頃までに周囲に家が建つても、この土地だけは藪笹が繁茂するにまかせたということである。又この地に次のような傳説が残つている。切支丹禁制の令厳しく教会堂も破毀せねばならなくなつた。せめてはと云うのでその鐘をこの地下深く埋没したが、不思議や夜が更ければ、地下にて鐘がうらめしそうに鳴り響いたというのである

伴林光平翁彰忠碑　（成法寺）

八尾市成法寺に、現在は廃絶しているが、幕末の頃教恩寺と云う荒れ果てた寺があつた。光平翁の由縁の寺で天保の末頃翁が江戸から呼び帰された時、住むに家なく介する人があつて、この教恩寺の住職となつた。時に弘化二年の六月で翁は三十三才の働き盛りであつた。檀家としては僅かに十数戸、まことに貧しい生活ではあつたが、文久元年二月大和法隆寺の駒塚の草庵に去るまで実に十六年間この寺に住んだのである。翁は住職となつたものの佛事勤行は決して本意ではなく、国典を講じ和歌を教え、荒廃の探査に最大の努力を捧げた。

現在この教恩寺の跡に立派な彰忠碑が建つている。碑面に「贈従四位伴林君光平碑・正二位勲一等伯爵田中光顯題」とあり裏面にに大西松の蔭撰文になる光平翁傳が刻んである。郷党の有志相謀つて、大正三年十一月に建碑された。碑の右側に古い瓦葺の平家があるこれは教恩寺の本堂を半分縮めて建てになほしたものだそうで、翁が慨然国事に盡すべく僧籍を脱して大和へ去らんとし、本

光平翁の顯忠碑

是神州清潔民、謬爲侮奴說同塵如今棄佛佛体、咎本是神州清潔民と本堂の壁に書き殘したのは実にこの建物なのであつた。惜しい事にはこの建物は昭和十二・三年頃に取毀され今は青年会場が出來ている。

茲に序翁の略傳を述べておこう、翁は文化十年九月九日に南河内郡道明寺村大字林の尊光寺という寺の二男に生れた。六才の時母を失つて、同郡丹比村の西願寺に養われ、十六才の春上京して、西本願寺の学寮に佛学を治めた。鋭意研鑽の結果二十二才で本山学寮の因明論講の教授となつた。その後国学に志し和歌の道を究めんと諸国に遊歴し、中村良臣、飯田秀雄、加納諸平等に学び爰に天保十年二十七才の時、江戸で国学の大家伴生友に師事した。西本願寺はこの事を聞いて、僧侶が国学を専攻することを非としてこれを詰つたので、翁は止むなく呼び帰され、八尾成法寺の教恩寺に入つた。これより十六年間、ひたすら国典和歌を講じ、門下実に数百の多きに及んだ。就中皇陵の探査に意を用い、河内国陵墓図、大和国陵墓験考、巡陵記事等の著述を完成した。文久元年二月に大和法隆寺の駒塚に移り住み、中宮寺の宮に出仕し、侍講となつた。文久三年八月天中組の大和義挙起るや、直ちに馳せ参じて勇戰大いにつとめたが、時に利あらず、同年九月廿五日幕吏に捕われ、元治元年二月十六日五十二才にして、京都六角の獄にて斬られた。著書は前記の外に難解機能重荷、河内国上古水土考、枯物語、三政一致說、於母比傳草、垣内七草、歌道大意、野山のなげき、篠屋独語等多数あるが殊に南山路雲錄は著名である。

環　山　樓　（八　尾）

環山楼は大字八尾通称産屋に殘つて居たが、昭和二十四年八月八尾税務署建築に際し、これをそのまま東方約一丁余に移轉し、現在は以前と同じく古色蒼然と控えている。

同楼は八尾の豪族石田氏の設立した学舎で、その創立年代は明らかでないが享保十二年に京都の碩学伊藤東涯が、この所に招かれて書を講じた際に名ずけられたものであつて、その誌す所の楼名の扁額並に環山楼記は、久宝寺の白木彌三氏に保存されている。

これによると環山楼の名は青山一脈、高安山より南に走り、二上、金剛の連峰が遙かにこの楼を環つて一望の裡に在り、勝景の亭館人々集つて、先人の遺書を繙き、古道を尋ね、相共に古今を慨し、尙道遺存するの感慨を深め、その席上で東涯因んで名ずけたのである。

当時八代將軍德川吉宗の実学の奬勵と文教刷新の影響をうけて、中央は勿論、地方諸藩に於ても、夫々藩校の設立があり、亦地方庶民教化の施設は、その他富豪商家の好学の風潮の頓に高まると共に、その頃次第に高潮に達し道を求める者相集まつてこれを支持し、それ等好学の人によつて各地に郷学、私塾の創立せらるるものあり、近くは享保二年創設の平野に於ける含翠堂あり、久宝寺には麟角堂があつて、この環山楼と共に夫々学者を招いて、講筵を開き、以つて世人の教導に資したのである。

享保十二年京都堀川塾の碩学伊藤東涯が平野の含翠堂に遊歴講說の砌、当地の石田利清その叔父利長、從弟可承飯田通古等この所に

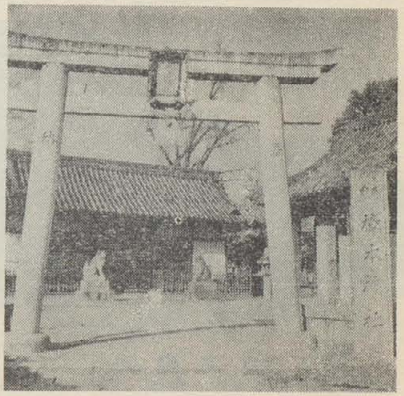
会して親しくその來講を求めて講席を開き以つてその師風を仰慕したのであつたが、この席に連つて親しくその講書をうけた人々にはなお利清の弟孝鳳、從弟利宮及び登口孤島等があり弱冠にして良くその說を学び鄉民の教化に指導的な務を果したのである。

翌々十四年伊藤東涯はこれを偲びつつその求めに應じて深い感慨の裡にこの墓記を物して贈つたものである。

石田利清は当時二十一才であつて、字は嘉右衛門義萍と号して賢明智策の才であり、弁舌を能くしてその識才鄉党一円に名高く、從つて鄉閭の子弟等はその德風学識を慕つて教を乞い私淑する者多く、目亦人爲り俠風があつて理非曲直を弁ずるのに嚴正無私であつたがために人をして再び相爭うことなからしめた程であつた。

その名声と共にここに学舍を設けてそれ等志学の人々に、或は知名の学者を招いて講席を設け、或は共に書を繙いて同行し鄉里の驚鐸となつた。それ故宝暦十四年五月五十九才を以つて歿した。

墓は高安村郡川法藏寺の後山にあつたが、これも昭和二十四年墓地整理により唯今は法藏寺の山門を入つてすぐ右側に積み重ねられた無縁塔の中にある。



樟本神社

樟本神社（木ノ本）

延喜式「樟木神社三座」とあるが当社で木ノ本、南木ノ本、北木ノ本の三部落に各一座づつ鎭座祭神は布都明神で、物部守屋の靈とも傳えている。この地は物部氏の本居であつて守屋地とか稻城の跡等の傳說がある。

澁川神社（植松）

国鉄八尾駅裏の前に鎭座祭神は、天忍穗耳命と饒速日命で他に攝社が四つある式内の鄉社で境内一千八百三十九坪老樹繁茂して荘嚴な神域である。当社はもと旧大和川（現在長瀬川）の東北岸に鎭座していたのであるが、天文二年五月五日に大和川が氾濫し社殿が悉く流失した。そこで氏子達は相議してこれを川の西南の高知即ち現在の地に遷し奉安した。旧若江、澁川の両郡はこの川を境としていたので当社は延喜式には若江郡とあり、河内誌には澁川郡とあるのは前記の事情による。

矢作神社（別宮）

姓氏錄河内国未定雜姓の部に「矢作連　布都奴志乃命之後也」とあつて、当地は矢作部の本居で、その祖神経津主命を祀つたのが当

社の起原であろう。式内社で明治六年鄕社に列せられ一名掃部宮とも、別宮八幡とも呼ばれている石清水八幡宮に現存する永久四年九月の大政官牒に、石清水八幡宮の各国各地にあつた社領を明記しているが、その中に老処字掃部別宮、若江郡御供田伍町玖段とある。これによると当地にその所領があつたため、いつの頃よりか石清水の分霊を当地に勧請し、別宮としたことが推察出來、又掃部宮別宮八幡と称する所以も知られる。

許麻神社　(久宝寺)

久宝寺の西南に鎭座する式内の古社で、祭神は許麻大神と云う。姓氏錄河内国諸藩に「大狛連出自高麗国人伊利斯沙礼斯也、又大狛連、出自高麗溢土福貴王也」とあるこの伊利斯沙礼斯の後は、大縣郡巨麻鄕に居住しここにその祖神を祀つた。即ち堅上の奥大字本堂の大狛神社であり、福貴王の後が本居としたのが許麻荘即ち、久宝寺である。河内誌に「在久宝寺村、今称天王有古筒、所謂色紙形者筒上題日、河州澁川郡許麻荘、神武、明星沢和歌日、許麻乃里沢辺爾生留杜若、君加手毎乃、水也加皿佐牟神武堤名、明星沢在村西北、生燕子花、百夏盛開」とあり、古來より燕子花の名所とされていたが、今はその面影も留めない。

許麻神社

なお当社々務所の辺は、久宝寺観音院のあつた跡である。同院は古義真言宗洛西御室御所真光院の末寺で大悲閣と呼ばれ久宝寺の古蹟である。同院の記錄に依れば久宝寺は聖德太子の御建立で、同太子自作の十一面観音を本尊とし推古天皇二年三月勅願所となつた以來当国佛法の中心として栄えたが、遂に松永彌正尙秀の兵火に罹り悉く烏有に帰した時の住持源山和尙は、本尊を背負い伊賀国下津に難を避けたが、永錄九年五月病没するに及んで本尊は又当地へ送り還された。当地では一字の堂もなかつたので里人の信施を以つて小堂を建立し、本尊を安置したのが久宝寺観音院の創始だと云う。なお堂院の鐘楼にあつた梵鐘は、その響殷々十里内外に及ぶと云われる名鐘で明治の初年の廢寺処分に行方不明となつたが、現在ソ聯モスコー・ニコライ堂に健在であるという。当社の井戸屋形はこの鐘楼を修繕して記念したものである。

年中行事一覧

1 月	1	歳旦祭（年飴祭）元旦祭、修正会	市内神社、佛閣其他の宗教（金光教、天理教）
	11	消防出初式	放水、玉落し
	14 15	とんど祭　成人の日	火焚神事
2 月	4	節分会、星祭　鎮魂祭	市内神社、中にも天神社（八尾）の追難式　免田太田八幡宮
	15	涅樂会	下の太子　大聖勝軍寺
	20	祈年祭	八尾天神社
	25	菅公命日祭	八尾天神社
3 月	3	桃の節句	女の節句（ひなまつり）
	15	稲荷まつり	澁川天神社、太子太川神社
	21 22	春分の日 彼岸会　春の霊祭	全市寺院（金光教を含む）
	31	春　祭	太田八幡宮
4 月	8	花まつり	佛生会（市内全寺院）
	15 16	稲荷祭　春ごと	さらし比枝神社　全農家は一家を挙げて野山に集い清興する日
	22	聖霊会	勝軍寺（太子）聖徳太子の霊を祭る
	24	大施餓鬼会式	八尾常光寺、近隣より善男善女つめかける、余興「地蔵おどり」（河内名物）
	29	天皇誕生日	
5 月	3	憲法記念日	
	5	端午の節句（子供の日）	男の節句
	7	物部守屋墓前祭	物部守屋の霊をまつり功を彰す（太子堂）
	.6	大　祭	金光教大祭（春季）

6　月	5 15 30	木村長門守墓前祭 青葉祭 大祓、夏越の祓	木村長門守討死の場所にその霊をまつる（大字西部） 太聖將軍寺（弘法大師の誕生祭） 年二回の大祓（全神社）
7　月	7 15 19 24 26 31	七夕まつり 夏祭り 〃 〃 〃 〃	太田八幡宮、木ノ本樟本神社 久宝寺許麻神社 八尾天神社 植松澁川神社、さらし比枝神社 別宮矢作神社
8　月	14 15 中　旬	盂蘭盆会 盆踊り	市内全寺院 市内各寺院境内に於て夜間盛んに行われる
9　月	21 23 21 27	秋の霊祭 秋分の日 彼岸会	市内金光教会 市内全寺院
10　月	8 9 13 16 21 24 25 中　旬	秋祭り 〃 〃 〃 〃 〃 八尾まつり	木ノ本樟本神社、太田八幡宮 さらし比枝神社、植松澁川神社、太子太川神社 植松澁川神社 別宮矢作神社 八尾天神社 全市商工業者合同大賣出し（仮装行列、各種行事）
11　月	3 15 16 23 25	文化祭（文化の日） 七五三祭 秋の大祭 勤労感謝の日（感謝祭） 新嘗祭	全市各種文化事業団体の行事 八尾天神社、さらし比枝神社 金光教会 全市各神社
12　月	25 31	クリスマス（降誕祭） 師走の大祓	前夜祭と共に基督教会の大行事 全市各神社
年中行事	毎月 11 27	お逮夜市	河内特に当市久宝寺別院の逮夜の日、参詣の善男善女目あての街頭市は延々十町に及ぶ名所旧蹟（お逮夜市）参照

あ　と　が　き

市勢要覧も回を重ねること三回となり。ここに昭和28年版の上梓をいたしました。第一回（昭和26年版）は新庁舎落成記念であり、第二回（昭和27年版）は市制五周年記念でありました。本回は市制進展の年でありたいと思います。市制実施以来満五年を経、市も更に躍進しつつあります。本書は所期の目的を半も果すことが出来ず、こんな内容、編集をお目にかけることになつてしまいました。全く編集者の企画のまずさのいたすところで、ご協力下さいました各課の原稿作成担当の諸様に感謝の意を表します。なお表紙の絵は「河内名所図会」（享和元年九月発行）全六冊中の第三巻からこれを転写、白ぬきとしたもので往時の八尾の賑やかさをしのぶにふさわしいものであり市民の関心の深いものと思いあえてこれを用いました。

八尾市広報課長　富　田　八　郎